

万 man

遊 yu

鏡 kyou

財団法人 鳥取童謡・おもちゃ館 わらべ館
平成19年度 ギャラリー「童夢」企画展報告書 第3号

ごあいさつ

わらべ館 館長 神戸直樹

今年度も『ギャラリー童夢企画展報告書 万遊鏡 第3号』を刊行する運びとなりました。わらべ館では、今まで以上におもちゃと童謡・唱歌をテーマとしたミュージアムとしての機能を強化し、その拠点施設として全国に情報発信をしようと考えています。

その第一歩として、平成17年度に『ギャラリー童夢企画展報告書 第1号』を発刊しました。翌18年度の第2号は「万遊鏡」と命名し刊行するとともに、『わらべ館童謡・唱歌研究情報誌 音夢』を創刊しました。これでようやくおもちゃと童謡・唱歌の拠点施設として全国に情報発信をするというわらべ館の計画が緒につくことになりました。

わらべ館では、将来は『音夢』同様、この『万遊鏡』も検討を重ねながら、充実したおもちゃの研究情報誌にしていく所存です。その手始めとして、今号では、4回の企画展の記録に加えて、わらべ館が取り組んでいる「むかしの遊び・うた」の収集事業の報告も掲載することにいたしました。

『万遊鏡』をご覧いただきました皆様の忌憚のないご意見、ご助言をいただきたいと思えます。重ねてわらべ館への温かいご支援ご鞭撻をお願いし、『ギャラリー童夢企画展報告書 万遊鏡 第3号』刊行のご挨拶といたします。

平成20年3月吉日

目次

ごあいさつ

◆ギャラリー童夢企画展

- 少女の“夢”とリアルー着せかえ人形展・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 木のおもちゃ展ー鳥取の木を遊ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- あやなす光と影ー光学玩具展・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- ちゅうちゅうねずかいなーねずみの郷土玩具展・・・・・・・・ 13

◆むかしの遊び・うた

- 鳥取のお手玉遊びについてー「とっとりのお手玉の会」の活動紹介ー・・・ 17

◆わらべ館の今まで（おもちゃと遊び関連） ギャラリー童夢展示履歴・・・ 21

本書は、わらべ館3階の「ギャラリー童夢」という展示スペースで、年間4回開催される企画展の平成19年度分の報告である。展示の企画については、長嶺泉子（調査・展示係専門員兼係長）が担当し、川崎香苗同係専門員、平緒佐和同係専門員、山本繭子同係職員が、解説の確認、展示の補助を行った。報告書の作成は、長嶺が担当、川崎、平緒、山本が補足し、総括を神戸直樹館長が行った。

「少女の“夢”とリアルー着せかえ人形展ー」

期間：平成 19 年 3 月 23 日～6 月 19 日

【開催趣旨】

2007 年（平成 19 年）は、日本の着せかえ人形を代表する「リカちゃん」が誕生して 40 周年にあたる。「リカちゃん」の外見やプロフィールなどは、発売当初から細かく設定され、常に少女たちの一歩先行く憧れのかたちを提示していた。それは、時代とともに変化を見せている。

また、先行する海外の着せかえ人形や人形以外の着せかえごっこができるおもちゃ等も紹介し、着せかえ遊びの特徴や性格を考察した。

【展示資料一覧】

資料名	年代	資料名	年代
髪人形	大正時代	あわてんぼクルリちゃん	1970 年代
着せかえ遊び	昭和 30 年代	パットちゃん	1970 年代
バービー	2005 年	ミキちゃんおつかい三輪車	2007 年
バービー	2007 年	マキちゃんおつかい三輪車	2007 年
いきいきバービー	1970 年代	トモくん	2007 年
バービーのサマードレス		リクくん	2007 年
バービーのナイトウェア		レディリカ	1970 年代
フランシー	1960 年代後半	アヤちゃん	1970 年代
フランシーのコートドレス	1970 年代	ジュンちゃん	1970 年代
バービーの妹スキッパー	1970 年代	リカちゃんハウス（初期型）	2007 年
バービーの妹ケリー	2007 年	お部屋いっぱいゆったりさん	2003 年
バービーベッド&カウチ	2007 年	くるくるおすし屋さん	1990 年代
タミー	1970 年代	リカちゃんスーパー	1970 年代
タミーのブックレット	2007 年	リカちゃんのシルバーウェア	1970 年代
プチブライスベストブルーコート	2007 年	白い家具シリーズファミリーキッチン	1970 年代
プチブライスフライトアテンダント	2007 年	ふわふわラブソファ	2007 年
プチブライスレインボーウィッシュ	2007 年	ファッションジェニー	2007 年
リカちゃん（初代）	1970 年代	ジェニーマイルーム	2007 年
リカちゃん（3代）	1980 年代	スカーレットちゃん	1970 年代
リカちゃんのブックレット	1967 年	カードスキャンドレスマニア	2007 年
香山織江コレクションリカちゃん	1990 年代	トリプルチェンジドレス	2007 年
小野小町リカちゃん	2000 年	メルちゃん幼稚園セット	2007 年
リカちゃん自転車おでかけ	2007 年	メルちゃんレインコート	2007 年
パパのピエール	1990 年代		

（すべてわらべ館所蔵）

【展示資料ピックアップ】

◆髪人形（図－1）

着せかえ人形ではないが、頭髮（結髪）のおしゃれを楽しむおもちゃとして、大正時代に遊ばれた「髪人形」を展示した（図－1）。当時の職人の技が生きた、こまやかな細工の一品。江戸時代にもあるおもちゃだが、「西洋上げ巻」が示すとおり、本資料には「文明開化」を経た新しい風俗が息づく。取り替えられる結髪は、この他「稚児髷」^{ちごまげ}「唐人髷」^{やいわた}「結綿髷」^{むすわた}「てまり髷」の計5点（図－2）



図－2 左から 西洋上げ巻 稚児髷 唐人髷 結綿髷 てまり髷



図－1 髪人形

◆タミーちゃん

バービーに遅れること3年後の1962年（昭和37）、アメリカのアイダル社から発売されたタミーは、少しふっくらした体型で、その子どもらしさが日本での人気を高め、「スカーレットちゃん」など国内のメーカーに類型の人形を作らせてしまうほどだった。

また、同じことはバービーにも言えるが、日本の着せかえ人形の奇抜さに比べ、タミーちゃんも服のデザインやコーディネートが美しく、ブックレットや箱（図－3）のイラストにもファンがいる。

図－3 タミー外箱



◆ブライス・プチブライス

リカちゃんは、バービーのようにだんだん小顔ですらりとした手足になっていくのに、このブライスは、2.5 頭身の、それも頭だけ特別大きな特徴を持つ体型を維持している。誕生した1972年にはその斬新さが受け入れられなかったためか、1年で生産中止となっている（参考資料1）。

独特の不思議な印象を与えるのは、その瞳のせいでもある。虹彩のはっきりした瞳の色が、青や紫、緑など4色に変化するような仕掛けがあり、背面にヒモがセットされている。

日本では、2000年（平成8）のクリスマス、とあるCMに使われて脚光を浴び、「ネオブライス」の名で製造、販売されるようになった。ちなみにそのボディは、リカちゃんと同じサイズだった（参考資料1）。

後に「プチブライス」（図－4）という今回展示した小型の人形も登場し、瞳のギミックはないものの、スリーピングアイ（まばたき）の機能があって、その不思議なたたずまいは、他の人形にも影響を与えている。



図－4

◆リカちゃん

着せかえ人形と言って、すぐに思い浮かぶのは「リカちゃん」だろう。2007年（平成19）に生誕40周年を迎えた彼女も、現在のモデルは4代目（5代目は2年間限定）となり、少女に飽きられないよう変えるべき所は変化している。たとえば、髪の色は栗色から金髪に変わり、

すました顔には微笑みが加わった。

家族構成にも変化が生まれ、パパの人形が登場し、さらにおばあちゃんや三つ子の弟までいるのは、他の着せかえ人形には見られない展開である。また、お城風な外見に小花柄のカーテンなど少女の夢やあこがれを託したリカちゃんハウスだが、最近ではコンビニや3LDKが登場し、現実的な感覚が人気ようだ。

40年のロングセラーを続けるリカちゃんは、社会学やデザイン工学の面など幅広い分野で考察の対象となり、単なる着せかえ遊びに留まらない多くの情報を社会に提供しつづけている。

【着せかえ人形の誕生と今】

◆バービーの誕生

バービーといえば、アメリカを代表する着せかえ人形（dress-up doll）だが、1959年（昭和34）に発売されたとき、その製造を手がけていたのは、アメリカのマテル社から依頼を受けた山一商店など、日本の玩具メーカー数社だった（参考資料2）。当時の日本製品は、おもちゃに限らず、海外では安かろう悪かろうのイメージを持たれていたが、それを覆す製作方針と技術開発によって、その出来栄えには賞賛の声が寄せられた。

今では、生産拠点を他の国に移しているが、ファーストバービーの高い評価は変わらない。

◆現代着せかえ事情

近年は、アパレル業界でも少女服の企画に力を注いでいるように、おしゃれを楽しむ子どもが増え、その選択肢には幅がある。遊びの中にも、たとえばコンピューターゲームの普及によって、着せかえごっこを液晶上でも楽しんでいる。

また逆に、リアリティを求めて、自分自身がアニメのヒロインやキャラクターになるべく、ドレスを着替えるセットも販売されている。どちらにしても、少女のこうなりたい、という変身願望を後押しする遊びだろう。

【関連企画】

◆デザイナー誕生！

期間（公募）：3月23日～5月6日

（コンクール）：5月12日～5月31日

（展示）：6月7日～19日



展示室全景

既製のドレスの着せかえでなく、こんなドレスを人形に着せてみたい、という願望を叶える企画として、「デザイナー誕生！」と銘打ち、デザイン画を公募して作品コンクールを開催した。入賞作品7点は実際に製作し、それぞれ人形に着せて、同じギャラリー童夢内に展示した。

〈参加者について〉

応募者は1人1枚として、ほぼ小学生以下の女の子だったが、鳥取市内に留まらず、帰省や観光による遠方からの来館者もあり、応募総数110枚に上った。小学校高学年になると、おしゃれの目が肥え、書き方のコツもわかるのか、生地や素材など細かな部分まで指定したり、TPOを意識したおしゃれを提案したりと、工夫を凝らして楽しんでいた。

〈応募から展示まで〉

全作品に通し番号を付けてボードに掲示し、投票用紙には番号とお気に入りの箇所・理由を記入してもらった。その中から7賞（図参照）に該当する得票数の多い作品を入賞作品に選んだ。

製作期間はわずか1週間だったが、裁縫の得意な職員に加え、この企画展に自作の服を着せた人形を寄贈された方々にも協力を依頼した。この展示期間中には表彰式も行い、東京都と兵庫県の入賞者を除いた5名の受賞者の「おしゃれ心」と独創性を称えた。

なお、前述の投票理由の中では、「自分が着てみたいから」が一番多く、その他「リボン（またはレース、フリル）がついているから」といったかわいらしいパーツを挙げる参加者が多かった。以前に比べ子供服と成人衣料の見た目の境界があいまいになり、特にフリルなどの装飾は少なくなっているものの、それを重視するのは、アニメのキャラクターからの影響なのか、リアルクローズとコスチュームの二極化と言えるのではないかな。

☆製作協力（ボランティア）小林久代氏、樋口英子氏、岡島千夏氏
（職員）山本繭子、川崎香苗、平緒佐和、長嶺泉子



春夏ドレスアップ賞



カラフル賞



春夏カジュアル賞



わらべ賞



秋冬ドレスアップ賞



ユニーク賞



秋冬カジュアル賞

【参考資料】

- 1 『お人形事典～ファッションドール編～』 たいらめぐみ著 グラフィック社 2004年
- 2 『女の子に愛されたファッションドール大図鑑』 純子セラフィーナ著 同文書院 2000年
『リカちゃんハウスの博覧会-マイホーム・ドリームの変遷』 増渕宗一監修 INAX出版 1995年 第3版
『デザインの解剖3 タカラ・リカちゃん』 佐藤 卓著 美術出版社 2002年

「木のおもちゃ展－鳥取の木で遊ぶ－」

期間：平成 19 年 6 月 21 日～9 月 18 日

【開催趣旨】

鳥取は、銘木「智頭杉」を生産する森林資源の豊富な土地柄で、県面積の 73.3%が森林である（2005 年「農林業センサス」）。趣味として地元産の木材を用いたおもちゃづくりに取り組む人も多い。今企画展では、それら鳥取の木々を使い、あるいは樹木の特徴を生かしたおもちゃを作る鳥取県在住の方の作品を紹介する第一弾として開催した。

【展示資料一覧】

作者名	作品	素材
のぼる 木村昇生 (境港市) クラシックカー	タッカートーベード	ケヤキ、タガヤサン、コクタン、ブビンガ
	シボレーマスターデラックス	ケヤキ、タガヤサン、シタン、コクタン、ブビンガ
	メルセデスベンツ	ケヤキ、タガヤサン、シタン、コクタン、ブビンガ
	フォルクスワーゲン	ケヤキ、タガヤサン、シタン、タウン材、ブビンガ
	オーバーン 8 2 6	ケヤキ、タガヤサン、シタン、コクタン、ブビンガ
ひろたにまさのり 廣谷全宣 (鳥取市) 杉のおもちゃ	ぐるぐる GOGO	スギ (智頭杉)
	つみ木むら	スギ (智頭杉)
	杉ころ	スギ (智頭杉)
	くるくるキュッキュツ	スギ (智頭杉)
	ビー玉あそび (へび)	スギ (智頭杉)、アクリル、ビー玉
	サムライピンボール (月)	スギ (智頭杉)、アクリル、ビー玉
松原好男 (鳥取市) 車のおもちゃ	木馬	シオジ、ニレ
	三輪車	シオジ、ニレ
	ワンちゃんカー	ケヤキ、ニレ
	ショベルカー	ケヤキ、ナラ、ミズメ
	ダンプカー	ケヤキ、ナラ、シオジ、ミズメ、ニレ
	ビー玉カー	ミズナラ、シオジ
	汽車ぼっぼ	ケヤキ、ナラ、シオジ
谷口かおり (鳥取市) 手遊びおもちゃ	ツムツム (積み木)	ケヤキ、他
	フムフム	タモ
	ヌクヌク	ケヤキ、トチ、ツバキ、ブナ、ヒノキ
	ガラガラ	ヒノキ
	カスタネット	ケヤキ、マツ
	渦うずコロリン	ケヤキ

【展示資料ピックアップ】

◆重厚なクラシックカー

境港市でクラシックカーづくりを続けておよそ 20 年になる木村昇生さんは、もともと木工を手がけていたが、旅行でハワイに行った際に出会った木彫りのクラシックカーに感動し、自身で制作するようになったとのことである。

使う木の種類は、ケヤキを主体にして見て、インドネシア産のタガヤサンやアフリカ産のズビンガ、またコクタンなど外国産が多く、クラシックカーに望む重厚さが表現できるためである。



木村昇生さんの工房（境港市）

それぞれの質感を生かして車のパーツごとに木を使い分け、丸みを帯びた造形と木目の柔らかさが調和をもたらしている。

木村さんの作品は、その重さからしても、大人が見て触れて楽しむおもちゃとしての人気があり、自分の愛車をつくってほしいという注文が入ることも珍しくないとのことだ。



オーバーン826

◆智頭杉と美しいデザイン

廣谷全宣さんが手がけるおもちゃは、簡潔で明快なデザインが生かされ、遊び方にも幅が生まれる。最新作の「ぐるぐるGOGO」（図-1）での子どもたちの遊び方を見ていると、ビー玉をただ転がすだけでなく、玉の大きさを変えたり何個かを同時にスタートさせたり、また指で弾いて逆流させてみたりと、工夫しながら遊んでいる。その他の作品も遊びのイメージを膨らませるデザインが多く、海外でも高い評価を得ている。



図-1

なお、素材には地元産の智頭杉を用いているので、軽くて扱いやすく、さらに遊びながら杉の良い香りを楽しめる利点がある（【木のチカラ】参照）。

なお、廣谷さんは鳥取の「ふるさと玩具研究会」のメンバーとして創作玩具を手がけ、わらべ館のおもちゃ工房で利用される木工キットの開発にも携わっている。



「くるくるキュッキュ」
パーツをつなぎ合わせる

◆転がすおもちゃ

トラックでも蒸気機関車でも、車がついたおもちゃは小さな子どもにとって、押し引きだけで楽しめるもの。「工房まつばら」の松原好男さんがつくるおもちゃには、大きな木馬から手のひらに収まる重機まですべてに車が付いているので、子どもたちは乗って移動、手で移動を何度でも楽しんでいる。

主に地元、八頭の広葉樹を利用して制作しているのは、シオジ、ケヤキ、ミズメ、カバなど、ささくれが少なく腰掛けたり握ったりするおもちゃに適しているという理由から。おもちゃのパーツごとに素材を使い分けており、木目や質感の違いが楽しめる。



ショベルカー

◆手のひらにおもちゃを

谷口かおりさんがつくる「フムフム」(図-2)は中にすずが入っていて、振るとかすかな音が聞こえるようになっている。お母さんが子どもをあやす時、そのかすかな音が周りに気遣いのいらぬおもちゃとして安心感がある、という声を貰ったそうだ。この他にも布地を組み合わせたガラガラやカスタネットなど、手のひらに収まり柔らかい音が鳴るおもちゃが多い。



図-2



木工ろくろで竹製のたつめ藁をつくる

谷口さんは大学で建築を、飛騨の職業訓練校では家具作りを学び、さらに鳥取

若桜で木地師の山根ただしさんに師事し、木工ろくろの技術を習得した。また、兵庫の山崎で漆の技法も学び、椀や鉢といった器づくりのかたわら、おもちゃづくりにもそれらの技術を生かしている。作品にはできるだけ県産材の利用を意識しているという。

【木のチカラ】

木には、人の健康に良い作用があるとされ、それらをおもちゃに当てはめると、下記のとおり子どもたちが手に取って遊ぶための恵まれた条件が揃っている(参考資料1)。

- ・ぬくもりが続く(断熱性が高い…空気を内部にため込むことができるため)
- ・目に優しい(反射率が50~60%…スギは日本人の肌色と同じ50%)
- ・体にぶつけても衝撃が少ない(衝撃の吸収率がプラスチックよりも高い)
- ・清々しさや安らぎを与える香り(フィトンチッドの効果)

【鳥取の木材利用】

鳥取市青谷町にある「青谷上寺地遺跡」という弥生時代の集落からは、加工する道具とともに木工製品が大量に出土しており、それらたかつき高杯やおけ桶などの用途に合わせた素材として、広葉樹ではヤマグワが、針葉樹ではスギが多く用いられている(参考資料2)。

そうした県内産の樹木について、今回のおもちゃに使われたケヤキ・シオジ・ナラ・スギなど木材の見本を鳥取県林業試験場からお借りし、樹皮や木目の様子なども見られるよう併せて展示した(図-3)。

今展示のおもちゃで見ると、木目や質感の違いを利用した多くの種類の木材が、適材適所で用いられている。木のおもちゃとひと言で言っても、見た目や重さ、温かさといった素材の選択肢が豊富にある。

ちなみに、「鳥取県の木」は「ダイセンキャラボク」である。



図-3

【関連イベント】

「親子でやってみよう！梨の木工作」

日時：6月30日（土）10:00～、13:30～

場所：わらべ館 おもちゃ工房

講師：藪田道男さん（「梨の木工房」）

鳥取の名産、と言ってすぐに思い浮かぶのは「二十世紀梨」ではないか。それでは、木材としてはどのような特徴があって、どんなことができるかを親子が協力するおもちゃづくりで体験してもらおうと企画したのが、このイベントの開催趣旨である。

講師には、梨の木を使ってペン立てやプレート、定規など実用品を制作する「梨の木工房」の藪田道男さんを迎えた。今回の素材提供も受け、直径約5cmの胴体部分になる枝と、直径約1cmの腕部分になる小枝、土台になる直径約10cmの輪切りを揃えていただいた。

工作の前に、まず、素材の梨の木について、小枝には黒っぽい樹皮に白に近い細かな斑点模様があるが（図-3）、太くなるに従いその模様がまったく無くなること、また、節が多く大型の家具づくりにはあまり向いていないことなど、梨の木の特徴と木工との関わりについて、経験を交えて説明された。

工作に入ると、土台にねじ釘を差し込む時のプラスドライバーを初めて手にする子どももいて、まず工具の使い方を講師や保護者から習う姿もあった。木工には大人の協力が欠かせなかったが、絵付けや飾り付けについては、見本を参考にしつつも、ポスターカラーやフェルト、リボンなどを思い思いに利用してユニークな作品を完成させていた。

館から「おもちゃ」として提案したのは「輪投げ」づくりで、小枝に投げるロープもつくったが、中には鍵や腕時計を掛けるインテリア用品に見立てている参加者もいた。

（担当：調査・展示係 山本繭子）

【参考文献・資料】

- 1 『木の遊具』中林影著、大月書店、1989年
- 2 『弥生の器』鳥取県埋蔵文化財センター、平成17年



講師による梨の木の説明



図-3 小枝の文具



幹に小枝を取り付け、顔や模様をつける



展示の様子

「あやなす光と影－光学玩具展－」

期間：平成 19 年 9 月 20 日～12 月 18 日

【開催趣旨】

光学玩具とひとと言っても、精巧な映写機から簡単に作れる万華鏡まで多種多様である。今展示では、近代から現代にいたる光学玩具と、それに関連する視覚玩具の代表的なものを提示し、また、日本独自の光学玩具として、江戸時代に生まれ現在も続く「写し絵」（錦影絵）の技術についても紹介することで、視覚を通して楽しむ道具としての玩具にスポットを当てた。

なお、光学機器や玩具をコレクションする映像史研究家の松本夏樹氏から多くの資料を借り受け、この企画展を開催するに至った。ここに謝意を表したい。

【展示資料一覧】

資料名	内容	備考
万華鏡（イギリス製）	替えレンズ（ボタン入）付	1980 年代
万華鏡（フランス製）	紫一色のビーズ	2000 年代
万華筒（中国製）		1980 年代
ドラゴンフライ		2000 年代
雑誌付録組立幻燈機	フィルム 2 本付	松本夏樹氏所蔵
教育キネマ（フィルム付）		松本夏樹氏所蔵
レフシー映写機		昭和 8 年 松本夏樹氏所蔵
レフシー紙フィルム	「のらくろ」	松本夏樹氏所蔵
絵葉書幻燈機（絵葉書付）		松本夏樹氏所蔵
木製幻燈機		昭和 17 年
活動幻燈機	フィルム付	大正
翼賛幻燈フィルム（6 本）	「ハワイ海戦」など	昭和 17 年
翼賛フィルム（6 本）	「平賀源内」など	昭和 17 年 松本夏樹氏所蔵
写真鏡	携帯用三脚付	明治・大正 松本夏樹氏所蔵
シネマトグラフ（フランス製）		1900 年代 松本夏樹氏所蔵
ガラス乾板式ステレオカメラ		1900 年代 松本夏樹氏所蔵
ステレオスコープ（金属製）		1900 年代 松本夏樹氏所蔵
ステレオスコープ（木製）		明治・大正 松本夏樹氏所蔵
ステレオ写真（6 枚）	浅草寺ほか日本の名所・風景	明治 松本夏樹氏所蔵
箱型ステレオスコープ	活劇の場面など写真付	昭和 17 年 松本夏樹氏所蔵
ベビートーキー（+蓄音機）	紙フィルム付	昭和初期
種板ガラス（15 枚入）	芝居絵	明治
雑誌『子供園』「玩具映画会」		昭和 7 年 松本夏樹氏所蔵
雑誌『少年』付録組立幻燈		昭和 29 年 松本夏樹氏所蔵
パラパラ漫画（2 冊）	表裏 4 種	昭和初期 松本夏樹氏所蔵

資料名	内容	備考
スライドストライプアニメ（4枚入3袋）		大正 松本夏樹氏所蔵
トリックブック（3冊）	「噫不思議（ああふしぎ）」	大正 松本夏樹氏所蔵
漫画活動	「 ^(ママ) TELEBIGION」	昭和 25 年頃
日光写真機（2点）		昭和 30 年代
ビューマスター		昭和 50 年代
ビューマスターフィルム（4点）	「ピーターパン」など	昭和 50 年代
ちびっこムービー（カセットフィルム付）	「キャンディキャンディ」	昭和 50 年代
ちびっこムービー（カセットフィルム付）	「一発貫太」	昭和 50 年代
ちびっこムービーカセット	「ジェットターマルス」	昭和 50 年代
ロータリーマガジンカセット	「魔女っ子チャッピー」	昭和 50 年代
影絵人形（5点）	「藤娘」「狸」など	昭和初期、廃絶した大阪の郷土玩具

【展示資料ピックアップ】

◆ドラゴンフライ

江戸時代の「^{まさかどめがお}将門眼鏡」というおもちゃは、平将門が7つの分身を持つという言い伝えにちなみ、卓球のラケット状の板にはめ込まれたレンズにカットが施され、向こうの物が7つに見えた（参考資料1）。

このドラゴンフライ（図-1）は、とんぼの目に例えた複眼レンズのおもちゃで、子どもの手に収まる小ささながらも将門眼鏡より多い16のカット面がある。



図-1

図-2 人形が大勢に

◆幻燈機

明治初期、文部省官僚が欧米から持ち込んだ「西洋幻燈」は別名「教育幻燈」といい、衛生、修身、愛国の啓蒙、啓発のため、全国規模で巡業が行われていた。さらに日清・日露戦争を経る中で、お国言葉ではない「国語」を普及させる目的で、幻燈などの映像媒体は一役買っていたという（参考資料2）。

時代を経て、簡単に扱える機器が登場すると、映写の担い手は子どもにも広がり、地域の集まりや家庭で楽しむのに適した幻燈は、昭和30年代まで馴染み深い娯楽となった。たとえば、宮沢賢治の『雪渡り』（大正10年・1921）では、幼い兄妹が子狐の幻燈会に招待され、上映を楽しむ様子が物語の重要なモチーフとなっている。

1942年（昭和17）製の幻燈機（図-3）に金属が使われていないのは、「七・七禁止令」（「奢侈品等製造販売制限規則」）に触れるため。この法令は、生活の中から、軍需に廻せるあらゆる物資を奪っていき、おもちゃは当然金属類の使用を禁じられ、この幻燈機も木材と樹脂で



図-3 木製幻燈機



図-4 フィルム外箱

作られている。なお、フィルムも時代の流れで、戦意高揚を目的とするものが多い（図-4）。

◆ビューマスター

このおもちゃの仕組みは、左右の目がそれぞれの画像を見られるようにするため、本体にセットする円盤状のカセットフィルム上にはほぼ同じ画像が対峙して、それをレバーで一コマずつ送りながら、ファインダー越しに立体画像を見る。たとえば12枚のフィルムが一枚の円盤（カセット）にセットされていると、一枚につき6つの場面を楽しむことができる（図-5）。

アメリカで1938年（昭和13）に発明され、一大センセーションを巻き起こしたビューマスターは、立体画像がどこでも気軽に見られる道具として、まず大人たちの眼を驚かせた。著名人のポートレートやアポロ11号の月面着陸までの様子、観光名所などが人気を博し、現在に至るまで熱心なコレクターが存在する。50年代になると、人気のキャラクターがフィルムに登場し、子どものおもちゃとしても安定した人気を得ている。

今回の展示資料は、70年代後半に日本の玩具メーカーが米国ビューマスター社から輸入したもので、同梱されていたフィルムは、名作アニメーションのダイジェスト版。

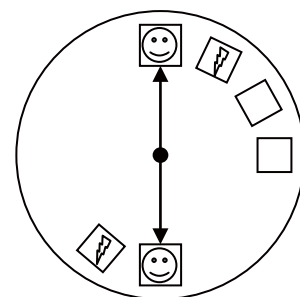


図-5 フィルムのつくり

【写し絵（江戸）・錦影絵（上方）・影デコ（鳥取）について】

江戸時代中期の18世紀、「マジックランタン」がオランダから到来すると、19世紀には木製の「風呂」と呼ばれる日本式に改められ、江戸では「写し絵」、上方では「錦影絵」という呼び名を得て、芸能史に足跡を残した（参考資料1）。鳥取でも「影デコ」（「デコ」＝人形）の名で県内各地を巡業し、娯楽の一翼を担っていた。

◆鳥取の「影デコ」

鳥取県立博物館には、鳥取県内で上演されていた写し絵の種板が49枚、「風呂」と呼ばれる映写機が1台収蔵されている。種板には「三番叟」「新徳丸」「化物」など踊りや芝居、子どもの喜ぶ出しものがあり（図-6・7）、細かい演出ができる仕掛け板も数枚含まれているが、どれも傷みがはげしく、また、複数の所蔵者の手を経ているとも指摘される。

これらは、県西部溝口町（現伯耆町）の組の道具が寄贈されたもので、鳥取県中西部にはこのような組が約50もあり、上記の演目以外にも、「日清・日露戦争」など情報性のある最先端の娯楽として、明治から昭和30年頃まで農閑期の農山村を巡業した。ちなみに赤碕の一座は語り手、三味線、太鼓、機械の操作係など合わせて6、7人で編成され、巡業には風呂を5台用いていた（参考資料3）。



図-6 種板「三番叟」（鳥取県立博物館蔵）



図-7 種板「化物」（鳥取県立博物館蔵）

【手影絵】

手や腕を使い、障子や壁に物の形の影を映し出す手影絵遊びは、単純な中に表現の可能性が多く含ま



図-8 うさぎ

かに

れている。だれもが一度はつくってみたことがある手影絵も光と影を利用した遊びのひとつとして、影あそび劇団「ジョイホナ」の作品から数個を紹介した（図-8、参考資料4）。

【体験コーナー】

展示資料の中から視覚おもちゃの「しましまアニメ」と「パラパラ漫画」、「トリックブック」の3点を複製し、体験コーナーを設けて遊べるようにした。昭和初期の子ども雑誌の付録として定番のものもあり、年配者からは「懐かしい」という声もあった。

「しましまアニメ」の仕組みは、一定の間隔で縦縞状に描かれた絵の上で、同じ間隔の縦縞模様のフィルムを左右にずらすと、下の絵の内、縦縞状の部分だけが動いて見えるもの（図-9）。



図-9 踊るだるま

【関連イベント】

◆光の箱をつくろう！（東北芸術工科大学准教授・松村泰三氏考案）

日時：平成19年10月6日（土）10:30～、13:30～

場所：わらべ館 おもちゃ工房

講師：調査・展示係 山本繭子

万華鏡のように、光を取り込んで楽しむおもちゃの工作を実施した。

作り方は、カー用品のミラーフィルムを任意にカットして、円筒状にテープで止めたものを、箱の中に十数個入れ、箱の窓にいろいろな色のカラーセロファンを貼り付ける。これに光を透かすと、箱の中には色の洪水が起こり、不思議の世界に引き込まれる。ミラーフィルムを雫型やハート型にする工夫も見られ、それぞれが自分なりの光の箱をイメージして工作していた。工作が終わると、参加者全員で屋外に出てあやなす光を楽しんだ。



【参考資料】

- 1 『いま・むかしおもちゃ大博覧会』兵庫県立歴史博物館 編 河出書房新社 2004年
- 2 「people vol.68・69」松本夏樹氏インタビュー『log osaka webmagazine』
http://www.log-osaka.jp/people/vol.68/ppl_vol68.html、[vol69.html](http://www.log-osaka.jp/people/vol.69/ppl_vol69.html)
- 3 『赤碕町誌』赤碕町誌編纂委員会 編 昭和49年
- 4 「手影絵の作り方」カニ・ウサギ『影あそび劇団 ジョイホナ』<http://www.joyhona.com/>
『写し絵』小林源次郎 著 中央大学出版部 昭和62年 参照
「ジャパニーズファンタスマゴリー 錦影絵 一授業に於ける復元と上演」池田光恵『大阪芸術大学 紀要〈藝術〉28』平成17年12月1日

「ちゅうちゅうねずかいな ねずみの郷土玩具」

期間：平成 19 年 12 月 20 日～平成 20 年 3 月 18 日

【開催趣旨】

年末から春にかけては、新しい年の干支をモチーフにした郷土玩具を展示している。今回は、干支の一番手、ねずみの郷土玩具を展示し、全国各地の郷土玩具の特色や、干支にまつわるエピソードなどを紹介した。

【展示資料一覧】

都府県	名称	分類	府県	名称	分類
青森県	唐辛子ねずみ笛	「下川原土人形」	愛知県	廻りねずみ	「名古屋からくり」
	曲唐辛子ねずみ笛		石川県	米喰いねずみ	木工玩具
	俵ねずみ笛 (大)			ねずみ	金沢張子
	俵ねずみ笛 (豆)		長野県	びっくりねずみ	「奈良井のからくり」
山形県	ねずみ	「笹野一刀彫」	滋賀県	俵牛のりねずみ	「小幡土人形」
	ねずみ (金)			赤でんち	
	赤かぶねずみ	ねずみのりねこ			
	ねずみ大黒面	土鈴ねずみ		「大津絵人形土	
なんばんねずみ	土鈴ねずみ				
岩手県	大黒ねずみ	「六原張子」	京都府	唐辛子ねずみ	「伏見土人形」
	ねずみ	繭玉細工		招きねずみ	
宮城県	赤かぶねずみ	「堤土人形」	大阪府	立ちねずみ	「柏原張子」
	唐辛子ねずみ		岡山県	小判ねずみ	「倉敷張子」
来らんしょ 子	桃ねずみ	「吉備津土人形」			
木槌のりねずみ	俵ねずみ				
福島県	福良雀のりねずみ	「中湯川土人形」	広島県	金時芋のりねず	「常石張子」
	親子ねずみ			干支ねずみ	
	大黒のりねずみ	「三春張子」	鳥取県	ねずみ (山陰十二支)	挽物細工
	俵ねずみ			ねずみ (鳥取のえと)	木工
開運ねずみ	「佐野土鈴」	ねずみ		「北条土人形」	
招福ねずみ		大黒ねずみ			
栃木県	ねずみ	「鹿沼きびがら細工」	島根県	俵のりねずみ	「因州若桜焼」
	俵のりねずみ			福鼠	「出雲張子」
	唐茄子ねずみ	「船渡張子」	香川県	福ねずみ	「高松張子」
	干支のねずみ	「芝原土人形」		土鈴ねずみ	「安芸土鈴」
干支のねずみ	高知県		俵ねずみ	「香泉土人形」	
張子ねずみ			親子福ねずみ		
東京都	大黒天ねずみ	「今戸土人形」	佐賀県	小槌ねずみ (大)	「能古見土人形」
	木槌のりねずみ			小槌ねずみ (小)	
	ねことねずみ	からくり		干支ねずみ	
	だるまのりねずみ	「江戸張子」	大分県	開運ねずみ	「別府土人形」
	千両ねずみ (車型)			開運ねずみ	
	奴ねずみ			招福ねずみ	
山梨県	深大寺ねずみ	「深大寺土鈴」	宮崎県	太鼓のりねずみ	「佐土原土人形」
	招福ねずみ	「甲府土鈴」		ねずみ土鈴	
静岡県	ねずみころがし	「浜松張子」	鹿児島県	米蔵ねずみ	「薩摩首人形」

(すべてわらべ館所蔵)

【展示資料ピックアップ】

◆「ねことねずみ」からくり箱（東京都 図-1）

このからくりは、単純ななかにねずみとねこの習性を見事に様式化したもの。江戸時代中期の画集『江都二色』に登場し、明治初期には海外へも輸出された、からくり玩具の名作で、かつては、大阪



図-1



図-2 『版藝術』より

や名古屋でも作られていたという（参考資料1）。

なお、同じからくりのねことねずみは朝鮮半島にもあり、昭和11年（1936）に出版された『版藝術』53月号「朝鮮土俗玩具集」の中で、屋根がついて鮮やかな色と模様使いで装飾された彼らを見ることができる（図-2 参考資料2）。

◆「唐辛子ねずみ」伏見土人形（京都府 図-3）・下川原土人形（青森県 図-4）・堤土人形（宮城県）

土人形の故郷、伏見人形の造形は、各地に類型が多く伝わっており、下川原人形は土笛になっている。



図-3



図-4 裏側

なお、唐辛子も種が多いことから、ねずみ同様に子孫繁栄を象徴している。

◆「大黒ねずみ」三春張子（福島県）・六原張子（岩手県）・れんべえ人形（鳥取県 図-5）

縁起物の類型として、おおくにぬし大国主に混同される大黒様とねずみを配した郷土玩具は数多い。須佐之男すけのみのはかりごとで炎に囲まれた大国主を助けるねずみは、後に大黒様の使いだとも言われるようになる。郷土玩具において、民間信仰の豊穰の神様との組合せは、鯛や童子などでも示される。



図-5

◆「ねずみころがし」浜松張子（静岡県 図-6）

明治初期に旧幕臣が始め、現在ではその後を受け継いだ女性たちの手で作られている静岡を代表する郷土玩具。当初、犬やうさぎ、たぬきだけだったのが、今では十二支が揃うようになった。左右の両輪が生み出す動きが軽妙感を誘う。



図-6

◆「廻りねずみ」名古屋からくり（愛知県 図-7）

このしかけもかつては大阪の玩具にも見られたそうだが、今では名古屋を代表するもの。江戸時代末期に生まれ、当時流行したからくりが用いられたという。たこ糸を張った横棒を前後に揺らすと繭玉のような小ねずみがくるくと向きを変える様子がかわいらしい。



図-7

◆「米蔵ねずみ」紙塑人形（鹿児島県 図－8）

紙粘土による首人形（紙塑人形）を作っていた鹿島たかしさんの手による蔵いっぱいの大ねずみである。平成8年（1996）の年賀切手の図案に採用され、愛嬌のある表情と手捻りによる温かみが伝わる。尾を引くと、ねずみも蔵の中にもぐるようになっている。

作者が近年亡くなられたことによる廃絶が悔やまれる。



図－8

【鳥取のねずみ】

◆「山陰十二支」（図－9）小椋昌雄さん・瀧本泰弘さん（岩美郡岩美町）

エゴの木を乾燥させ、ろくろで成型する挽物細工で、大（約20cm）・中（約10cm）・小（約6cm）の3タイプある。ねずみの場合は耳や脚などが揃い、形ができると、膠にかわを下塗りし、泥絵の具を使って本塗りをする。翌年の干支を作るのに、夏から作業を始めるとのこと。3代目の昌雄さんは現在78歳と



図－9



左が小椋昌雄さん、右は一緒に作られる瀧本泰弘さん

◆「北条土人形（れんべえ人形）」（図－10）

加藤廉兵衛さん（東伯郡北栄町）

かつて地元の天神川土手の土と倉吉の上神かすわの土を用いて作られていた人形だが、環境の変化により、現在では、岐阜の土を利用している。満州から引き上げた後、倉吉の土人形にひらめきを得て創作活動を始め、その独創性が民藝運動の吉田璋也に認められ、「れんべえ人形」と命名された。現在91歳になるが、自作は伝統工芸とは異なるものと捉え、制作には新しい材料も試している。



雛人形を前に

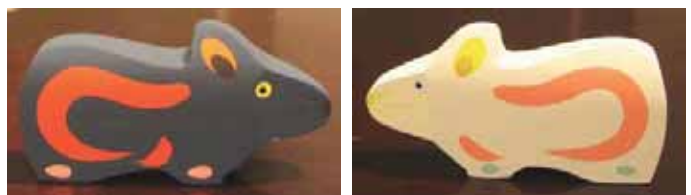


図－10

る。廉兵衛さんの手捻てびねが生み出す、なんともとぼけた表情が魅力的なねずみである。

◆「鳥取のえと」（図－11）信夫賢太郎さん作（鳥取市）

鳥取市上町にある工房では、木工による大（約15cm）・中（約10cm）・小（約6cm）と豆型の4タイプの干支が作られており、簡潔で鮮やかな模様が、干支それぞれの特徴を的確に捉えている。2代目の賢太郎さんは、昭和40年（1965）に家業を継ぎ、流し雛も含め、民芸品・木工品も制作している。今年は初めて白ねずみを制作し、ねずみは2タイプが揃った。



図－11 新作の白ねずみ（右）

- ◆「干支土鈴（因州若桜焼）」（図-12）大坪英治さん作（八頭郡若桜町）
日常使いの器から郷土玩具まで手がける大坪さんも土鈴や土人形で干支を制作している。そのサイズは、大きいものでは全長約 40cm 強にもなるが、大きな金の俵を前脚で抱え、大見得を切るその表情と発色の鮮やかさは敷布の緋毛氈ひもつせんに映える。



図-12

大坪さんも新しいモチーフに取り組み、平成 19 年（2007）には、若桜駅の転車台に蒸気機関車が常駐したのを受け、「SL 土鈴」を制作したところ、鉄道ファンのみならず多くの人の注目を集めている。

【関連イベント】

- ◆干支を彩る郷土玩具—ぬりえで年賀状

期間：平成 19 年 12 月 20 日・21 日・22 日 14:00～15:00（22 日のみ 15:00～16:00）

場所：わらべ館 1 階 企画展示室

郷土玩具の輪郭をはがきに印刷してぬりえをするという企画。幼年者の参加者が多く、7 点の郷土玩具から選んでもらったところ、甲府土鈴と能古見人形に人気集中し、細かい彩色のものは、敬遠されてしまった。この企画は干支の郷土玩具展に帯同して今後も開催するが、作品の選定はあらかじめ人気投票などリサーチをしておくべきかもしれない。



- ◆えとのうたを歌う会

日時：平成 20 年 3 月 8 日 14:00～

場所：わらべ館 いべんとほーる

講師・伴奏：鈴木恵一さん

協賛：とっとり童謡唱歌の会

協力：コーラス久松

干支の郷土玩具展に合わせて春先に開催する歌の催しとして、今回は「えとのうた」をテーマに、ねずみからうし、うまなど干支の動物にちなんだ歌を歌った。プログラムには、「ずいずいずっころばし」（鼠）、「アイアイ」（猿）、「めんこい仔馬」、「大黒さま」（兎）など、参加者だれにも親しみのある歌が並んだ。



鈴木さんのアコーディオン伴奏に合わせ、出演者と参加者のコーラスが一体となり、さらに「ミッキーマウスマーチ」で手拍子や振付が加わると、会場全体に春が訪れたかのような温かみのあるコンサートとなった。

【参考資料】

- 1 『郷土玩具辞典』 斎藤良輔編 東京堂出版 昭和 54 年 5 版
- 2 『版藝術』 第 53 号「朝鮮土俗玩具集」 白と黒社 昭和 11 年
- 3 『【鳥取】ふるさとの民話』 酒井董美著 ワンライン 2000 年
『全国郷土玩具ガイド』 1～4 畑野栄三著 婦女界出版社 平成 4 年初版

鳥取のお手玉遊びについて

－「とっとりのお手玉の会」の活動紹介－

【お手玉遊びの基本形】

お手玉遊びは、数個のお手玉を振り投げる「振り技」系（ジャグリングの動き）と、上に投げるお手玉と地面に置かれたお手玉を寄せ集める「拾い技」系に大別される。

お手玉の原型とされ、羊の距骨を使う「アストラガリ」は、拾い技の遊び方をしており、後に伝えられた日本でも、まずは「いしなご」として、小石を投げ上げる間に寄せ集める拾い技の遊び方が普及した。その後、布袋に数珠玉や小豆、大豆などを入れ、音や感触も楽しめるお手玉が作られると、投げ上げ、ゆりまわす振り技が盛んになった（参考資料1）。

○おさら **拾い技**

おさらは「よせだま」ともいい、お手玉を3個、5個、7個…と使って遊び方としては、放り上げたお手玉が落ちる間に、地面にある他のお手玉を動かすもの。「おてっぷし」※と言って落ちてくるお手玉を手の甲で受ける技も加え、バリエーションも豊富。

※おてっぷし（お手ふし）

投げ上げたお手玉を手の甲で受け取ったり、そのまま上に弾いたり、また、弾いた玉を掴み取るなど、手の甲を利用しながら振り技を繰り返す。

○突き玉、投げ玉 **振り技**

2、3個を両手や片手でリズム良く回転させて受けまわす。上達するとさらに数を増やし、両手を交差させたり、おてっぷしを挟んだりして、変化に富む遊び方ができる。ジャグリングとも言う。

拾い技、振り技のどちらも基本動作から歌や言葉に合わせて数やリズムに変化が生まれる。地域や家ごとに伝わる内容も異なってくるが、そのどれが正しいということはない。

◆鳥取県内におけるお手玉遊びの活動紹介

○「とっとりのお手玉の会」について

平成4年（1992）に「日本のお手玉の会」（愛媛県新居浜）の会員となった福田環氏が、翌年、会長として発足させたのが「とっとりのお手玉の会」である。同7年には「日本のお手玉の会」支部第1号となり、県中部の倉吉市を拠点に活動している。

その設立趣旨は、技の継承と身体を使う遊びを通して、現代っ子たちの豊かな心を育みながら、地域に根ざした伝承遊び「お手玉」を伝えていくこと。また、伝承活動での世代間交流や、手先や身体の使い方によって健康増進が期待される側面も重視している。

倉吉市には「お手玉の館」が設置され、関連資料の保存と活用にも取り組み、毎週木曜日に会員やお手玉遊びをしたい人々が交わり、日常的な普及活動を行っている。そのかたわら、発足から計8回、県内各地で開催している「お手玉遊びの集い」では、幅広い層に向けた遊び方や競技会、お手玉作りの体験・講習会を展開し、「お手玉遊び」の認知度を高め、親しみを持ってもらうようにしている。こうした大きなイベント以外でも、社会教育施設や福祉施設などでも教室を開き、だれもがお手玉遊びに親しむ機会を設けている。

平成20年2月現在、県内の会員構成は38名（内、男性1名）。倉吉市横田596 tel 0858-28-0889（福田環方）fax 0858-28-0988（梓島和江方）



お手玉の集いでの会員による実技

○今までの「お手玉遊びの集い」

回	年月日	場所	内容
1	平成6年6月17～20日(金～月)	倉吉市 百花堂	1個遊び、お手玉づくり
2	平成9年6月7日(土)	倉吉市青少年ホーム	同上
3	平成11年8月15～18日(金～月)	倉吉市 百花堂	会員作品展、参加者との交流
4	平成14年2月10日(日)	東郷町 水明荘	お手玉遊び、講演会
5	平成15年9月27日(土)	鳥取市 わらべ館	お手玉づくり、お手玉遊び
6	平成16年11月14日(日)	青谷町中央公民館	伝承の技、「ずずこの歌」のふるさと
7	平成18年5月13・14日(土・日)	関金町 グリーンスコーレ	手遊びの楽しさ、伝承の技
8	平成19年11月20日(火)	米子市 ふれあいの里	技能体験、お手玉づくり、振り技競技

○平成19年度「お手玉遊びの集い」から

このイベントは県中部での開催が多いが、この回は、西部の米子市ふれあいの里を会場として、平日の終日を使って開催された。そのため、年配者と主婦層の参加者が多く、若年層がかなり少なかった。遠く尾道から参加した5～6名の団体もあり、地域間の交流がうかがえた。



振り技の練習

〈会員による実技〉

鳥取の会員による拾い技や振り技が披露され、近年発掘された「ずずこの歌」に合わせる表現遊びも実演された。「ずずこ」とは数珠玉のことで、「こんぼし」とも言う。鳥取市青谷町の会員が紹介して広く知られることになったこの歌と拾い技は、会員の長いお手玉歴においても特異な技として、注目を集めている（参考資料2、詞後記）。

〈講演〉

長年学童保育指導員として、お手玉などの手遊びを通して交流活動を続けてこられた田中邦子氏（滋賀県在住）をゲストに迎え、講演と福田会長との対談が行われた。田中氏はお手玉以外の伝承手遊びについても著作があり、お話の内容は、右手が不自由なりにいろいろと手遊びを工夫した思い出や、それが友だちづきあいにも良い影響を与えたことなど、実体験を交えたものであった。

加えて福田氏は、「指先に心を込めて」遊ぶことを意識して、お手玉遊びによるリハビリや脳の活性化への効果を挙げた。

〈お手玉の作り方・基本の運針について〉

古典的なお手玉の作り方を配布資料と大型見本で説明。できるだけ絹の古切れを用いると、手になじむ柔らかさがあるという。もちろん現代の化繊でも構わないが、このざぶとん型（ともえ型）が拾い技・振り技どちらにも具合が良いとのこと。日本のお手玉の会でもこの型を競技用に行っている（図-1）。

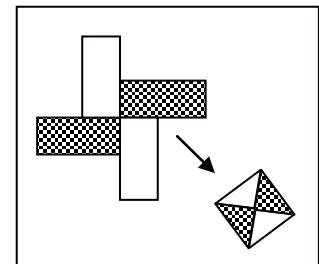


図-1 ざぶとん型

また、手縫いにはスムーズな運針が理想なので、晒しに赤糸で縫う練習と「第1回運針大会」が開かれた。年配者は手馴れた様子でちくちくと縫い上げており、お手玉より何倍も大きい型で作る小座布団の作り方を習う積極的な参加者もいた。

〈実技〉

午後の部では、「振り技を競う」のタイトルのもと、「2個ゆり」「3個ゆり」「片手2個ゆり」「3個でジャグリング」まで、練習と時間競技を行い、それぞれ優勝者は賞状を授与された。中には5、

6個の振り技をこなす会員もいて、参加者からは驚きの声も挙がっていた。

競技のほか、約10人単位で車座になり、「どんぐりころころ」など歌に合わせ、お手玉を隣へ受け渡していく遊びもいくつか試された。傍からは簡単に見えたが、自分のリズムで動けないためか、全員揃ってひとまわりするのは意外と難しいようだ(図-2)。

○級位認定

「日本のお手玉の会」には段位制度があるが、「とっとりのお手玉の会」ではそれを細分し、10級から特級までそれぞれ15秒間こなす技が決められ、両手で2個の振り技は8級、3個になると4級、片手で3個は特級、というステップになっている。最上級の特級は、先述の段位では4段に該当する。

◆お手玉遊びの歌

お手玉遊びのあるところ、遊び歌も欠かせない。既刊の文献にもいくつかのお手玉遊び歌が掲載されているが(参考資料3)、ここでは「とっとりのお手玉の会」で収集された歌を紹介する(参考資料4)。

○拾い技(寄せ玉)…親玉1個、子玉2個の歌

♪おさら(よせだま) 倉吉市

おさら おみんな おさら	大きい橋 くぐれ 大きい橋 くぐれ
お手のせ お手のせ 落として おさら	くぐりこして おさら
おつかみ おつかみ 落として おさら	大石 大石 小石 小石で おさら
おちりんこ おちりんこ おさら	大袖 大袖 小袖 小袖で おさら
おひだり おひだり みぎひだり みぎひだり	おおてば おおてば てばたき てばたき
なか つま さらえ ひよこは やちよ	一 二で おさら
やっちょめ 落として おさら	かまきり かまきり しょ
お手ぶし お手ぶし ぶしで おさら	ドッテンショ ドッテンショ
おんば おんばの のりかえ おかごの のりかえ	ドドテンショで おさら
のりこして おさら	なんがんしょ しょ しょ
小さい橋 くぐれ 小さい橋 くぐれ	おしまい
くぐりこして おさら	

♪ずずこの歌(こんぼし歌) 鳥取市青谷町河原

おひとつ おひとつ おひとつ おひとつ	あんめよ あんめよ あんめよ
おひとつ	あんめよ あんめも おどしこ
おふたつ おふたつ おふたつ おふたつ	おどしこ おどしこ おどしこ
おおみつ おおみつ おおみつ おおみつ	おどしこ おんだいべき
おおみな おおみな おみくり かえして	べきせんなり べきせんなり べきせんなり
おってん ばらり	べきせんなり べきも
じょうくも じょうくも じょうくも	おさらし おさらし おさらし
じょうくも じょうくも あんめよ	おさらし おさらし おねがやし



大きなお手玉を投げ上げる
レクリエーションのひとつ



図-2

おねがやし おねがやし おねがやし
おねがやし おねも
おかいっしょ おかいっしょ おかいっしょ
おかいっしょ おうかいももだし
ももだしパッタン ももだしパッタン
ももだしパッタン
ももだしパッタン ももも
かきこしバタバタ かきこしバタバタ
かきこしバタバタ
かきこしバタバタ かきも
一俵 二俵 三俵 四俵 五俵 もけた
一俵 二俵 三俵 四俵 五俵 もけた

一俵 二俵 三俵 四俵 五俵 もけた
一俵 二俵 三俵 四俵 五俵 もけた
おまけし おまけし おまけし おまけし おまけし
一朝 かやせば 二朝 かやせば 三朝
三朝 かやせば 四朝 かやせば 五朝
いつも いつも たんたん たけのぼし
すわれんげの 花びら 切りとつてもこい
たたみつ むこうの お山の おかみの
ちょうせん ちょうばば 咲いたか 咲かぬか
わたしらの じじ ばば のこいたたみつ おひとつ
とつても 隣のお客様は っこう かやして
おひとつ

♪おひとつおひとつ 鳥取県東部

おひとつ おひとつ おひとつ 落として おさら
おふたつ おふたつ おふたつ 落として おさら
おみつつ おみつつ おみつつ 落として おさら
おみんで おさら
お手しゃみ おてしゃみ おてしゃみ 落として
おさら
おつかみ おつかみ おつかみ 落として おさら
おちりんこ おちりんこ おちりんこ 落として
おさら
お手たたき おてたたき おてたたき 落として
おさら
しいる しるしるどんぎり おさら

おんばさみ おんばさみ おんばさみ まねいて
おさら
おてのふし たけのふし おてのふし たけのふし
まねいて おさら
おひだあり ひだりぎっちょ おひだあり ひだりぎっ
ちょ みぎひだり
なかよし つまよし まねいて おさら
小さい橋 くぐれ 小さい橋 くぐれ
小さい橋 くぐれ おさら
大橋 くぐれ おみんで おさら
〇〇〇さんに 一反 かしました

♪おひとつおひとつ 鳥取県東伯郡

おひとつ落として おひとつ落として おさら
おふたつ落として おさら
おみんな おさら
お手しゃみ おてしゃみ 落として おさら
おはさみ おはさみ 落として おさら
おちりんこ おちりんこ おさら
小さい橋くぐれ 小さい橋くぐれ おさら
大きい橋くぐれ 大きい橋くぐれ おさら

おひだり ひだりぎっちょ おひだり
ひだりぎっちょ みぎひだり
なかきて つまよせ
さらりとてんつきしろつき おさら
お手つぶし 竹のふし お手つぶし おさら
しいろとんぎり おさら
とんぎり ばらり
一反 一俵 かしましょう

【参考文献】

- 1 『お手玉』日本お手玉の会監修 大西伝一郎文 文溪堂 1997年
- 2 「よみがえれ お手玉」とつとりのお手玉の会 福田環編著 私家版 2006年
- 3 『山陰のわらべうた』酒井董美著 三弥井書店 平成16年
- 4 「資料集」とつとりのお手玉の会編 私家版 2006年

わらべ館の今まで

(主におもちゃ関連の事項を掲載)

年	月 日	出 来 事
1995 (平成 7)	7月 5日	ヘッセン人形博物館との間に姉妹館提携協定を締結
	7月 7日	わらべ館開館
1999 (平成 11)	4月 9日	「おもちゃ講演会」(年1回開催) 始まる
2000 (平成 12)	9月 14日	ヘッセン人形博物館との姉妹館提携5周年の記念に「姉妹館交流5周年展」を開催
2001 (平成 13)	11月 20日	3階おもちゃの部屋に「姉妹館交流コーナー」を新設
2002 (平成 14)	2月 21日	3階の新着資料コーナーを「ギャラリー童夢」とし、企画展を開催
2003 (平成 15)	10月 23日	ヘッセン人形博との人形交流始まる カスパール人形⇄千支の郷土玩具
2004 (平成 16)	6月 13日	ヘッセン人形博との人形交流② ケテクルーゼ人形⇄因伯牛の木彫り
	6月 19日	2階おもちゃの部屋の体験スペースを拡張
2005 (平成 17)	7月 7日	ヘッセン人形博との人形交流③ トラハテンプッペン⇄押し絵羽子板
2006 (平成 18)	8月 23日	ヘッセン人形博との人形交流④ 「星の銀貨」人形⇄五月人形「金太郎」
2007 (平成 19)	11月 5日	ヘッセン人形博との人形交流⑤ 「ケテ・クルーゼ」人形⇄「リカちゃん」(人形・服・小者・家)

ギャラリー童夢展示履歴

年度	期 間	タ イ ト ル
平成14年度	2月21日～5月21日	「鳥取の郷土玩具展—節句のおもちゃたち—」
	5月16日～8月20日	「板裕生の世界～裕生が愛した鳥取のおもちゃたち～」
	8月21日～10月8日	「鳥取の郷土玩具作家三人展」
	10月9日～12月17日	「東北のこけしたち」
	12月19日～翌3月18日	「ひつじの郷土玩具展」
平成15年度	3月20日～6月17日	「雛と天神」
	6月19日～9月16日	「愛され続けた市松人形」
	9月18日～12月16日	「雅な遊び」
	12月18日～翌3月16日	「申」
平成16年度	3月18日～6月15日	「押し絵～絵と工芸の融合～」
	6月19日～9月14日	「立版古～錦絵に込められた小世界～」
	9月16日～12月14日	「からくりの機素～物の動く仕組みを理解しよう～」
	12月16日～翌3月15日	「酉」
平成17年度	3月19日～6月14日	「テディベア～100歳を超えた友だち～」
	6月16日～9月9日	「山本千恵子 和紙人形の世界」
	9月10日～12月20日	「こま コマ 独楽」
	12月22日～翌3月14日	「戌年来る」
平成18年度	3月16日～6月20日	「扇は胡蝶と戯れて～伝統遊戯 投扇興」
	6月22日～9月19日	「ドイツと鳥取 おはなしの世界」
	9月21日～12月19日	「懐かしさと新しさと—昭和30年代の子どもたち」
	12月21日～翌3月21日	「日本のいのしし」

『ギャラリー童夢企画展報告書 万遊鏡』第3号

発 行 平成20年3月31日

編 集 財団法人 鳥取童謡・おもちゃ館 (わらべ館)

〒680-0022 鳥取市西町3丁目202

Tel 0857-22-7070 Fax 0857-22-3030

印 刷 株式会社日ノ丸印刷